

第6章 考察

第1節 神木坂2号墳と磚槨式石室

神木坂2号墳の埋葬施設は第4章第2節で述べたように、著しい攢乱を被っていたものの、奥室を有する磚積の横穴式石室（磚積石槨、磚槨式石室）であることが明らかとなった。石室は側壁の一部が残存するのみであるが、全長（現存長）6.1m、羨道長（現存長）1.95m、羨道幅1.2～1.36m、奥室長（現存長）1.15m、奥室幅1.17mを計測できる。玄室部は右側に幅0.48mの袖を有するが、左袖部の詳細は明らかでない。石室主軸を基に図上復原すると、玄室幅2.14mとなるが、左袖部相当箇所と石室ほりかたとは接することから、玄室の平面形は左右対称とはならない。左袖部は石室構築時から設けられず、右片袖であった可能性も考えられる。なお、片袖の場合、玄室幅は1.69mに復原できる。玄室部と奥室部との取り付き箇所の石材も認められないため、その詳細は明らかでない。石室なかほどに東壁を構成した基底石1石が残っており、ここまでを奥室とするとその長さは2.55m以上となる。この場合の玄室長は1.5m前後と推定される。

石室を概観すると、いわゆる「横口式石槨」状の形態を呈し、「ハ」字形の羨道から左右不对称の玄室、奥室へと続くが、玄室はそれほど大きなものではないと推定される。石室壁面はやや内傾する基底石を残すのみで、詳細な石室の断面形態は明らかでない。残存石材の積み方、各石材の規模等から、奥ノ芝2号墳に比較的、類似していると考えられる。

石室内の各所から埋葬時の遺物が若干、出土している。攢乱により、ほとんど原位置を保っていないものの、玄室部分からは土師器、須恵器等の土器類、奥室部分からは木棺に使用されたと考えられる鉄釘類が比較的まとまって出土している。奥室内から金環も検出していることから、奥室に木棺が安置されたと考えられるが、釘は散乱したような状態のため、棺の法量等は復原できない。玄室内での木棺の安置、追葬の有無は明らかでないが、その可能性は少ないとと思われる。

出土した須恵器はⅢ型式1段階、土師器は飛鳥Ⅱ期に比定でき、この古墳の築造年代は7世紀第2四半期と考えられ、磚槨墳の一時期を明らかにできたといえよう。

榛原石（室生火山岩：流紋岩質熔結凝灰岩）の板石を磚積みにしたこの種の古墳が大和盆地東南部の桜井から宇陀・榛原の地域を中心に分布していることは、以前から知られている（表13）。丹切33号墳は、古墳群中に位置しているが、その他の古墳は、従来、古墳が築かれなかった地域、あるいは数少ない地域に認められ、大和から伊賀、伊勢、東国へと通じる山中の主要道付近に点在している。榛原町町域では神木坂古墳群を中心として周辺に比較的まとまっており、南北2km、東西1.5kmの範囲に6基が存在している。

これらの磚槨式石室は、すでに平面形、玄室の断面形態から第1類から第4類の4種類に分類されている。このうち、奥ノ芝2号墳、丹切33号墳は第1類に分類されており、奥壁および側壁は基

底部から徐々に内側に持ち送られ、途中から大きく内傾し穹窿状を呈する。また、神木坂2号墳と同種の平面形を呈する花山西塚古墳は第3類に属し、美しく整えられた石材を垂直に積み上げ、天井近くで壁面は鋭く内傾する。奥室を有しないが、南山古墳もここに属している。

出土土器、石材の加工法、榛原石の石棺、漆喰等の評価も含めてこれらの築造順序を列挙すると、丹切33号墳→奥ノ芝2号墳→奥ノ芝1号墳→花山西塚古墳・南山古墳となる。神木坂2号墳の石室石材の加工は、花山西塚古墳のものより粗雑で、漆喰の使用も認められない。むしろ、石材の積み方、加工法は奥ノ芝2号墳に近いといえる。先の順序に神木坂2号墳を組み入れるなら、奥ノ芝2号墳と並行と考えられ、花山西塚古墳に先行するものである。発掘調査等が実施されていないため詳細は明らかでないが、奥室の一部が露出している西峰古墳も、石材の積み方、加工法等から花山西塚古墳より先行するものと推定される。現段階では、奥室を有する磚槨石室の初現は神木坂2号墳といえよう。西峰古墳も神木坂2号墳と同時期、またはやや下降するものと考えられ、7世紀第2四半期でも後半としておきたい。なお、近接した2基の古墳に構造上の共通点が多く、築造時期も同時期または相前後したものは、『日本書紀』でいう「双墓」とも考えられている。5基からなる舞谷古墳群を除いても、花山西塚・東塚古墳、忍坂8・9号墳、奥ノ芝1・2号墳が2基1組となっており、双墓としての特長を備えているといえよう。神木坂2号墳・西峰古墳も同構造、同時期と考えられ、双墓としてとらえられている。しかし、この2古墳はふたつの大きな谷部と尾根を挟み、直線距離にしても約700mをはかる非常に離れた位置関係となっている。いわゆる「双墓」ではないが、むしろ神木坂2・3号墳を1セットと捉えることができよう。

磚槨式石室の被葬者については、各古墳の諸要素によって以前から、渡来系氏族を含む中央官人、地方支配者層などといわれている。また、大和や河内に多く分布する「横口式石槨」は、石室の規模、構造等に一定の共通性が認められることから、中央の政治的影響のもとに築かれたと考えられている。磚槨式石室等に用いられる磚状に加工した榛原石の使用は、6世紀末の飛鳥寺造営を契機としてはじまる。飛鳥寺造営にあたっては、中央政権によって掌握された技術者集団の存在が指摘され、ここには、高麗系、百濟系など渡来系の人々の関与が考えられている。このことから榛原石を加工した工人集団にも渡来系技術者の存在が推定されている。

磚槨式石室のなかでも、立地、平面形、構造、漆喰の有無等、様々な相違が見うけられる。これらの違いは被葬者の地位・階層差に起因するものと考えられ、なかでも、特殊な奥室を有する花山西塚古墳、神木坂2号墳、西峰古墳等の被葬者は、より中央的な地位にあった人物と推定される。

表13 磚櫛式石室一覧表

(単位 m、() は現存規模、※は復原規模)

古 墳 名	所 在 地	墳 形、規 模	石 室 全 長	道			玄 室			奥 室 高
				長	幅	高	長	幅	高	
丹切33号墳	桜原町萩原	円墳、径12	(4.28)、※6.6	(1.35)	1.08	(0.95)	2.93	1.71	1.40～1.57	—
奥ノ芝1号墳	桜原町福地	円墳、径15	6.31	3.75	0.90～1.05	(1.20)	2.56	1.20	1.45	—
奥ノ芝2号墳	桜原町福地	円墳、径10	7.05	4.05	1.26～1.37	1.55	3.00	2.00	1.90	—
南山古墳	桜原町萩原	円墳、径15	(3.60)	(0.50)	1.3	(0.60)	3.10	2.21	(2.3)	—
神木坂2号墳	桜原町萩原	方墳、一辺15	(6.1)	(1.95)	※1.2～1.36	(0.45)	(1.30)	(0.70)	(1.15)	1.17 (0.58)
西峠古墳	桜原町下井足	円墳、径10	8.17	4.00	1.10	1.45	2.20	1.38	1.63	(1.00) 0.8
花山西塚古墳	桜井市栗原	円墳?径17	(3.15)	(1.74)	(3.15)	(0.80)	(0.80)	※1.90	—	—
花山東塚古墳	桜井市栗原	円墳、径20	(4.40)	(1.74)	1.12	0.95	0.90	—	—	—
舞谷1号墳	桜井市浅古	方墳、一辺13.8×9.7	西石室 4.7 中央石室※4.5	※0.90	(0.80)	—	—	—	—	—
舞谷2号墳	桜井市浅古	方墳、一辺10.6×9	東石室 4.7	0.90	(0.60)	—	—	—	—	—
舞谷3号墳	桜井市浅古	方墳、一辺14×9	西石室 4.35 中央石室	0.59	0.59	—	—	—	—	—
舞谷4号墳	桜井市浅古	方墳、一辺14.2×10.2	東石室 4.46	0.99	(0.26)	—	—	—	—	—
舞谷5号墳	桜井市浅古	方墳、一辺13×11	西石室 4.46 中央石室	0.99	(0.26)	—	—	—	—	—
忍坂8号墳	桜井市忍坂	円墳?径11	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	—
忍坂9号墳	桜井市忍坂	円墳?径11	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	(1.9)	—
庚申塚古墳	桜井市山田	方墳、一辺26	12.5	9.54	1.5	1.3	2.95	3.30	2.56	—
黄金塚古墳	奈良市窪之庄町	—	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	—
塔の奥2号墳	菟田野町東郷	円墳、径9m	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	—
平田12号墳	三重県安濃町	円墳、径9m	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	(2.74)	—
							(正六角形の平面プラン)	※2.05	※2.62 (0.80)	—
										—

参考文献

- 中村 浩『陶邑』I・II・III 大阪府文化財調査報告書第28・29・30輯 大阪府教育委員会 1976・1977・1978
- 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II 奈良国立文化財研究所学報第31冊 奈良国立文化財研究所 1978
- 泉森 皎ほか『宇陀福地の古墳』 奈良県文化財調査報告第17集 奈良県教育委員会 1972
- 菅谷文則ほか『宇陀・丹切古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊 奈良県教育委員会 1975
- 前園実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県教育委員会 1982
- 岡崎晋明ほか『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』 奈良県文化財調査報告書第39集 奈良県教育委員会 1982
- 泉 武ほか「舞谷3号墳」『奈良県遺跡調査概報』1980年度 奈良県立橿原考古学研究所 1982
- 堀田啓一、林部 均「桜井市舞谷4号墳の発掘調査」『考古学ジャーナル』No.238 ニューサイエンス社 1984
- 柳沢一宏『橿原町遺跡分布調査概報』 橿原町文化財調査概要2 橿原町教育委員会 1987
- 伊藤秋男ほか『平田古墳群』 安濃町遺跡調査会 1987
- 猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」『研究論集』III 奈良国立文化財研究所学報第28冊 奈良国立文化財研究所 1976
- 泉森 皎「「双墓」に関する二・三の問題について」『藤井佑介君追悼 考古学論叢』 藤井佑介君を偲ぶ会 1980
- 泉森 皎「磚槨式横穴石室墳」『月刊奈良』11月号 1987
- 菅谷文則「橿原石考—大化前後における石工集団の興廃」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾 末永先生米寿記念会 1985
- 楠元哲夫「大和橿原石石棺の系譜」『考古学と移住・移動』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1985
- 林部 均「飛鳥時代の古墳の地域性—特に大和、河内を中心として—」『考古学論叢』第11冊 奈良県立橿原考古学研究所 1985